

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー

Creative Well-being Tokyo

Autumn Session on
Open Access to Culture
2025

だれもが文化でつながる
オータムセッション2025

「居場所とわたし」

2025. 10/20 MON – 10/23 THU



読み上げ用テキスト

Creative Well-being Tokyo

Autumn Session on Open Access to Culture 2025

だれもが
文化でつながる
オータムセッション
2025

「居場所とわたし」

日時	2025年10月20日(月)–10月23日(木)
会場	自由学園 明日館 〒171-0021 東京都豊島区西池袋2丁目31-3
主催	東京都 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
入場料	無料
使用言語	日本語・日本手話
特設ウェブページ	https://creativewell.rekibun.or.jp/creativewell-conference/2025.html



「だれもが文化でつながる会議」は、東京都とアーツカウンシル東京が取り組む「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の一環として、2022年から継続的に開催されてきました。4年目となる今年は、だれもが文化でつながるオータムセッション2025「居場所とわたし」を開催いたします。

2024年は「文化と居場所」をテーマに国際会議を開催しました。居場所について芸術文化の側から焦点化し掘り下げていくなかで、居場所とは「わたし」にとってどのような意味をもつのかという問いにたどり着きました。

その議論を引き継ぎ、オータムセッションでは「居場所とわたし」というテーマのもと、居場所のあり方やつくり方について意見を交わします。登壇者には、芸術文化にかかわる実践者と研究者や、アーティストを迎える予定です。ご来場のみなさまが、それぞれの現場で実践できることを考える場となれば幸いです。

4日間のプログラムは、多様な実践例をめぐる議論から気づきを得る「セッション」、事業運営の場でいかせるアクセシビリティや手法を学ぶ「セミナー」、東京都の取り組みや先進的なデバイスなどを紹介し、アート作品を通して「居場所とわたし」について考える「展示・ワークショップ」、参加者と登壇者が交流し、ネットワークを醸成する「ネットワーキング」の4つのセクションから構成されています。

みなさま一人ひとりが文化を通してたらされる「居場所」について考え、そしてその居場所に「わたし」がどうかかわっていくのか。ともに学び、考え、実践へとつなげる4日間となることを願っています。

本オータムセッション2025の開催にあたり、ご協力いただいた関係者のみなさま、そしてご来場くださったすべてのみなさまに心より感謝申し上げます。

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

	講堂	食堂 / ミニミュージアム	ホール	大教室 タリアセン	大教室 としま	会議室 Rm1925
		14:30-18:00 EXHIBITION 03 「居場所とわたし」作品展示				
14:30	OPEN		交流スペース 14:30-18:00			
15:00	15:00-15:30 開会式	開会式 あいさつ 東京都生活文化局 局長 古屋留美 オープニングスピーチ アーツカウンシル東京 機構長 青柳正規 開催によせて 自由学園明日館 館長 福田 竜				
15:30	15:30-17:30 OPENING SESSION					
16:00	「生活圏」と アート					
16:30						
17:00	小泉元宏 中嶋透 宮永愛子 森司					
17:30						
18:00		CLOSE				

お弁当を事前予約された方へ

事前に来場登録フォームにてお弁当をご予約された方は「大教室タリアセン」にて受け取り、お召し上がりください(館内その他のお部屋では飲食できません)。

※受け取り時に代金1,200円(税込)を現金でお支払ください。

※10/21(火)・22(水)は12:30まで、23(木)は12:00までにお受け取りください。

喫茶のご案内

食堂にて喫茶の営業がございます。お支払いは現金のみとなっておりますので、ご了承ください。喫茶でのお買い上げ品は、食堂でのみご飲食いただけます。セミナー実施中は食堂への出入りはできません。

会場の注意事項

会場となる自由学園明日館は重要文化財に指定されています。

以下の注意事項をお守りいただき、みなさまが気持ちよくご利用できるようご協力をお願いします。

- 来場者用の駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。
- 飲食物のお持ち込みは原則禁止となっております。健康管理のための飲料につきましては、水筒、ペットボトル飲料など、スクリュー型の蓋のもののみお持ち込みいただけます。館内では出したままにせず、都度お鞄のなかにおしまいください。コンビニエンスストアやコーヒーショップ等のプラスチック蓋のコーヒー等は、漏れによる汚れ防止のためお持ち込みいただけません。
- 来場者によるセッション・セミナー・ワークショップでの写真撮影・録音・録画はお断りしています。

	講堂	食堂 / ミニミュージアム	ホール	大教室 タリアセン	大教室 としま	会議室 Rm1925
		10:00-17:00 EXHIBITION 03 「居場所とわたし」作品展示				
10:00	OPEN	喫茶 10:00-16:00	交流スペース 10:00-17:00			
10:30	10:30-12:00 SESSION 01 文化的な ケアの実践					
11:00				11:00-11:30 EXHIBITION 04 デバイス説明 ロジャー・マイクロホン	昼食会場 11:00-12:30 ※要事前予約	
11:30	天野未知 唐川恵美子 田中真実			11:30-12:15 WORKSHOP 04 自由学園明日館 建物解説ツアー		
12:00						
12:30		12:30-13:30 SEMINAR 01 アクセシブルな ウェブデザイン とは何か				
13:00	13:00-14:30 SEMINAR 02 バリアフリー 活弁士による 鑑賞体験	伊敷政英 萩原俊矢			13:30-14:30 WORKSHOP 01 触知図を つくるには	
13:30					上野智義	
14:00	檀 鼓太郎 石井健介 関場理生		14:10-15:10 SEMINAR 03 手話通訳の 基本と 理論の重要性			
14:30			飯泉菜穂子 那須映里			
15:00						
15:30	15:30-17:00 SESSION 02 アートの気配が ある居場所					
16:00						
16:30	青木彬 松浦千恵 富塚絵美					
17:00			CLOSE			

	講堂	食堂 / ミニミュージアム	ホール	大教室 タリアセン	大教室 としま	会議室 Rm1925
		10:00-17:00 EXHIBITION 03 「居場所とわたし」作品展示				
10:00	OPEN	喫茶 10:00-16:00	交流スペース 10:00-17:00			
10:30	10:30-12:00 SESSION 03 更新された 美術館の役割					
11:00				昼食会場 11:00-12:30 ※要事前予約		
11:30	大政 愛 木内真由美 駒井由理子		11:30-12:15 WORKSHOP 04 自由学園明日館 建物解説ツアー			
12:00						
12:30		12:30-13:30 SEMINAR 04 学習障害と 支援教材	12:50-13:20 EXHIBITION 04 デバイス説明 VUEVO			
13:00		高田裕美 加藤 甫	13:20-14:00 TABLE TALK 01 動画における 情報保障 二瓶 剛・平塚千穂子	10:00-17:00 EXHIBITION 01 都立文化施設の 社会共生の取り組み 展示		
13:30				13:45-14:45 WORKSHOP 02 伝わる フォントと 文字組を知る		
14:00		14:10-15:10 SEMINAR 05 カームダウン スペースを つくる	高田裕美			
14:30	14:30-15:20 映像上映 谷川俊太郎+谷川賢 作+口ばの音楽座 「ことばとあそぶ おととあそぶ」	佐藤慎也 綿貫愛子				
15:00	15:30-17:00 SESSION 04 居場所の 見つけ方					
16:00						
16:30	砂連尾 理 松本雅隆 齋藤祐良					
17:00			CLOSE			

	講堂	食堂 / ミニミュージアム	ホール	大教室 タリアセン	大教室 としま	会議室 Rm1925
		10:00-17:00 EXHIBITION 03 「居場所とわたし」作品展示				
10:00	OPEN	喫茶 10:00-16:00	交流スペース 10:00-17:00			
10:30	10:30-12:00 SESSION 05 世界と対話 するための身体					
11:00		11:00-12:00 SEMINAR 06 日常をアートで デザインする			昼食会場 11:00-12:00 ※要事前予約	
11:30	田畠真由美 和田令子 都司明子	仲 幸藏 福田 忍 佐藤李青	11:30-12:15 WORKSHOP 04 自由学園明日館 建物解説ツアー			
12:00						
12:30						
13:00		13:00-14:00 SEMINAR 07 文化事業と評価	13:20-14:00 TABLE TALK 02 盲ろうの 世界に触れる 田畠快仁・森 敦史	13:00-14:00 WORKSHOP 03 「やさしい日本語」 で話す		
13:30		清水潤子 渡辺龍彦				
14:00						
14:30	14:30-16:30 CLOSING SESSION					CLOSE
15:00		わたしの居場所 —未来のあたり まえを考える				
15:30						
16:00	石原保志 小山田 徹 森 司					
16:30						
17:00		CLOSE				

SESSION

セッション

会場 講堂

OPENING SESSION

「生活圏」とアート

10/20(月)
15:30-17:30



人々の記憶や場所の歴史を取り込みながら作品を生み出す二人のアーティストと、理論と実践の両面からアートシーンを語る社会学者。2025年のテーマ「居場所とわたし」を出発点に、「生活圏」においてアートが活用されることで、ウェルビーイングにどのような作用をもたらし得るのか議論します。

SESSION 01

文化的なケアの実践

10/21(火)
10:30-12:00



生き物とのふれあいを通して命を考える活動、医療・福祉とアートとの新たな試み、福祉現場と芸術文化をつなぐ実践に取り組む三者の視点から、共生社会における双向のケアのあり方について話し合います。

SESSION 02

アートの気配がある居場所

10/21(火)
15:30-17:00



「アートの気配」が人々の心をほぐし、交流を生み出し、豊かな居場所づくりへのきっかけになることがあります。アートプロジェクトを企画してきた二人のディレクターと、依存症の方の支援に携わるソーシャルワーカーの三者で、福祉や医療などの現場におけるアートの存在の大切さについて意見を交わします。

SESSION 03

更新された 美術館の役割

10/22(水)
10:30-12:00



美術館におけるインクルーシブ・プログラムを含め、すべての人にひらかれたアートの場づくりの実践を重ねてきた二人の登壇者が、更新された美術館や文化施設の役割やその可能性をモデレーターを交え、語り合います。

SESSION 04

居場所の見つけ方

10/22(水)
15:30-17:00



音や身体の動きを通じて、属性に縛られない「居場所」を生み出してきた二人のアーティストと、地域文化の創造に携わってきたモデレーターが、あそびやたのしさを通して発見した心地よい場の見つけ方を考えます。

SESSION 05

世界と対話 するための身体

10/23(木)
10:30-12:00



ろう者や盲ろう者の身体感覚に基づき、世界と対話することについて考えます。盲ろう児の子育てや、感覚を重視した住まいづくりに取り組んできた登壇者と、美術教育の専門家が、それぞれの知見と美術教育の視点から多様な身体の可能性を見つめます。

CLOSING SESSION

わたしの居場所 —未来のあたりまえを考える

10/23(木)
14:30-16:30



だれもが社会に参加できる「居場所」をつくるために、障害者の社会参加や学びの場を創出してきた教育者と、人々の協働による場づくりを続けてきたアーティストが、大学の学長としてアートが他分野と協働することで切りひらく「あたりまえ」の未来像を語ります。

SEMINAR

セミナー

会場 食堂 (SEMINAR 02のみ講堂)

SEMINAR 01 10/21(火) 12:30-13:30

アクセシブルな ウェブデザインとは何か

「だれもが使える」ウェブサイトのつくり方を学びます。アクセシビリティに配慮した制作の経験豊富なウェブディレクターと、企業や行政とも協働してアクセシビリティ向上に従事してきた視覚障害のあるコンサルタントとの対話をヒントに、ウェブサイトを利用する「だれもが」について根本に立ち戻って考えます。

登壇者



伊藤政英
アクセシビリティ・コンサルタント



萩原俊矢
ウェブディレクター、プログラマー、デザイナー

SEMINAR 02 10/21(火) 13:00-14:30

バリアフリー活弁士による 鑑賞体験

多様な表現技術を駆使するバリアフリー活弁士、見える世界と見えない世界をつなぐブライド・コミュニケーター、そして当事者として舞台に立ち活躍する俳優・ナレーターの三者が、「見える」を超えた感じ方を共有し、場の空気感も含めて楽しめる音声ガイドの可能性を探ります。

実演



檀 鼓太郎
俳優、演出、ナレーター、バリアフリー活弁士

登壇者



石井健介
ブライド・コミュニケーター



関場理生
俳優、ナレーター

SEMINAR 03 10/21(火) 14:10-15:10

手話通訳の基本と 理論の重要性

文化事業や会議における手話通訳導入の基本的な心得、専門的内容や複雑な議論を正確に伝える手法、手話の言語構造、ろう文化とのかかわりや、通訳者の倫理からコーディネートの役割に至るまで、対話を通じて掘り下げます。

登壇者



飯泉菜穂子
手話通訳士、手話通訳技能研修講師



那須映里
役者、手話エンターテイナー

SEMINAR 04

10/22(水) 12:30-13:30

学習障害と支援教材

UDデジタル教科書体のフォント開発者と、知的障害のあるこどもたちの居場所づくりに取り組む主宰者が、テクノロジーや支援教材がこどもたちの学びの環境を改善し、社会とのつながりに果たす役割を語り合います。

登壇者



高田裕美
書体デザイナー

聞き手



加藤甫
写真家、Studio oowa主宰

SEMINAR 05

10/22(水) 14:10-15:10

カームダウンスペースをつくる

カームダウンスペースやセンサリーマップの必要性が、公共空間やイベント会場など、多様な場面に広がっている現状について、建築家と当事者であり公認心理士として発達障害のある人々を支援する専門家の二人が解説します。

登壇者



佐藤慎也
日本大学理工学部建築学科教授、八戸市美術館館長



綿貫愛子
東京都自閉症協会役員

SEMINAR 06

10/23(木) 11:00-12:00

日常をアートでデザインする

東京都東村山市で、地域の人々や事業者、自治体を巻き込みながらプロジェクトを開催してきたチームと東京アートポイント計画のプログラムオフィサーが、区市町村と連携して取り組む事業のあり方について語り合います。

登壇者



仲 幸藏
編集者、ディレクター



福田忍
デザイナー、アートディレクター

聞き手



佐藤李青
アーツカウンシル東京
プログラムオフィサー

SEMINAR 07

10/23(木) 13:00-14:00

文化事業と評価

「評価」が価値を明らかにする行為であると捉え直し、数値など既存の基準に依存しない、価値を可視化する新たな評価のあり方として、協働事業や市民活動に伴走し、評価に取り組む研究者とプロジェクトマネージャーが、意見を交わします。

登壇者



清水潤子
武蔵野大学人間科学部
社会福祉学科 講師



渡辺龍彦
編集者

EXHIBITION

展示

日時 10/20(月) – 23(木) 10:00 – 17:00

(最終日23(木)はEXHIBITION 01のみ15:00まで)

EXHIBITION 01

都立文化施設の社会共生の取り組み

会場 | 大教室としま

東京都歴史文化財団が運営する都立文化施設では、2024年度から各館に社会共生担当職員を配備し、だれもが芸術文化にアクセスできる環境づくりを進めています。美術館や劇場での取り組み事例や、やさしい日本語による施設案内パンフレット、触知図などの実際に活用している制作物を展示し、社会共生担当職員と直接情報交換できる場を設けます。

EXHIBITION 02

カームダウンスペースの試み

会場 | 東外廊下

施設への恒久設置のみならず、イベント会場など多様な場面への導入を想定し、カームダウンスペースのさまざまなあり方を、建築家による研究成果も含めて展示します。そして、センサリーマップ、センサリーキットとあわせて自由学園明日館におけるセンサリーフレンドリーの試みを展示します。

制作 日本大学 理工学部建築学科
佐藤慎也研究室

協力 綿貫愛子
東京都自閉症協会 役員

EXHIBITION 03

「居場所とわたし」

会場 | 講堂
ミニミュージアム(食堂)
ホール
大教室タリアセン

「居場所とわたし」からアーティストが想起した作品を通して、自己と他人との境界の曖昧さ、言語に限定しない他者とのコミュニケーション、社会や世界との関係性について思考をめぐらせます。アートの力を媒介に、アーティストとアート作品がもたらす、物理的な場所にとらわれない居場所の捉え方に出会い、その可能性を考える時間となります。

出品 AKI INOMATA 小山田 徹 中崎 透 宮永愛子
美術家 芸術家 美術家 美術家

EXHIBITION 04

アクセシビリティ整備に活用できるデバイス

会場 | ホール

だれもが芸術文化を楽しむためには、障害のある方のみならず、すべての人がストレスなくすごせる環境を整えることが大切です。芸術文化に関する情報へのアクセス、鑑賞、参加といったあらゆる場面で、より多様な人々を受け入れる環境の整備に役立つ、聞こえ方の違いや多言語に対応したデバイスを展示します。

出展 ロジャー マイクロホン (騒音下や離れた距離での語音認識を改善する難聴補助システム)
10/21(火) 11:00-11:30(説明) VUEVO(ビューボ) ((「だれが」「何を」話したかが直感的にわかるコミュニケーション促進ツール)
10/22(水) 12:50-13:20(説明)

COLUMN

センサリーフレンドリーを知っていますか?

綿貫愛子

静かで落ち着いた環境を提供する「感覚にやさしい取り組み」について解説します。

日常生活と感覚過敏

日常生活は、光や音、匂い、触感など、さまざまな感覚刺激にあふれています。多くの人にとって、それらは背景のように自然に受け流せるものです。しかし、一部の人にとっては、刺激が過度に強く感じられ、不快感や苦痛を伴うことがあります。明るい照明によって頭痛が引き起こされたり、日常の物音が大きく響いて恐怖や疲労につながったりすることがあります。このような状態は「感覚過敏」と呼ばれ、自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症(ADHD)など、神経発達症(発達障害)のある人によく見られる特性です。

感覚過敏の背景

感覚過敏は、脳における感覚処理の特性によって生じます。自分の意思や努力だけでは調整が難しく、学習や仕事、外出など、日常のあらゆる場面に影響を及ぼします。周囲が理解し、環境を工夫することで、負担を軽減することができます。

感覚過敏などへの配慮として、近年注目されているのが「センサリーフレンドリー(sensory friendly)」という考え方です。感覚過敏や感覚処理の違いがある人々が安心してすごせるように、光や音、空間の構造など、環境にかかる刺激条件を意図的に調整した空間や体験をいいます。

具体的な取り組みの例

・クワイエットアワー (Quiet Hour)

商業施設や文化施設で特定の時間帯に照明を落とし、館内放送やBGMを控えることで、静かで落ち着いた空間をつくり出します。

・カームダウンスペース (Calm Down Space)

照明や音を抑え、椅子やクッションを備えて、刺激から一時的に距離を取れる休息の場を提供します。

・センサリーマップ (Sensory Map)

館内の光や音、匂いなどの特徴を示した地図を用意し、利用者が自分に合った経路や過ごし方を選べるようにします。

・センサリーキット (Sensory Kit)

サングラスや耳栓、フィジエット玩具(手のなかで単純な動作を繰り返すことでストレスや不安を緩和する玩具)、重みのあるひざ掛けなどをまとめて用意し、必要に応じて使えるようにします。

だれもが安心して参加できる社会へ

こうした取り組みは、感覚過敏のある人だけでなく、こどもや高齢者、体調によって刺激に敏感になる人など、さまざまな人にとっても過ごしやすさにつながります。

センサリーフレンドリーは、人の感覚の多様性を前提とした環境づくりの視点であり、ユニバーサルデザインの理念にも通じています。その実践が広がることで、だれもが安心して参加でき、一人ひとりが自分らしくともに生きられる社会へと近づいていきます。

ARTIST
AKI INOMATA

会場:講堂(銀杏の間)

〈他者〉の視座をかたちにする「翻訳の芸術」

小泉元宏

AKI INOMATAの代表作の一つである《彫刻のつくりかた》は、ビーバーとの共作がベースとなっている。ビーバーの飼育場に木の角材を置き、かれらがもつ「木を食べたり、伸びた歯を削ったりする」という習性を利用して、彫刻のような「作品」を生み出してもらうという試みからはじまった。こうしてビーバーが齧った「作品」を原型に、タイや日本の彫刻家が約3倍のスケールで彫刻を制作する(3倍という比率は、ビーバーとINOMATAの体重比に由来する)。そこには彫刻した人間作者の解釈が加わった「第2」の作品が現れる。

さらに、第3のアプローチが——今回展示されているのが——ビーバーが齧った木を3Dスキャンし、そのデータをもとにCNC切削機で掘り上げた「作品」である。加えてINOMATAは、木材内部にカミキリムシが開けた穴を発見し、CTスキャンで解析して、かれらの視点をイメージしたCG映像作品もつくり上げた。ビーバー、人間、機械、そして虫たちの、同一なようで、少しづつ異なる「彫塑」。それらは社会における異なるアクターの関係性を示すかのようである。

INOMATAの作品は、これまで人間活動が地球に与える不可逆的な影響を問う「人新世」概念や、人間中心主義を相対化するダナ・ハラウェイのサイボーグや伴侶種(伴侶動物)などに関する理論と関連づけて論じられてきた(例えば金澤 2020、岩崎 2020)。これらの視点の重要性を踏まえつつも、本稿では彼女の作品を、ブリュノ・ラトゥールが提唱するアクター・ネットワーク理論(ANT)の観点から捉え直したい。それは、主体/客体、人間/自然といった近代的二元論を超えて、人間と非人間(モノ、概念、環境)が構成する動的な関係性の網の目として世界を記述する視座である。ラトゥールによれば、社会とは固定された構造や、一方が他方を生み出す因果律に基づく関係性によるものではない。社会、社会的領域、社会的結びつきといったものは存在せず、跡をたどることが可能な結びつきを生み出す媒介者間の翻訳活動が存在する、アクター間のネットワークである、と彼はいう(Latour 2005)。



彫刻のつくりかた Yuzu II

2025年 / CNC切削された木(一本、けやき)
size: 161×29×29cm
photo: Hayato Wakabayashi

INOMATAの実践は、この「翻訳の社会学」と呼ばれる視点と重なりつつも、とりわけ重要なのは、「わからない」各アクターの感覚を可視化することで、アクター間の違いや共有の可能性を実存的に想像するための情動を含んでいることである。ビーバーをはじめ、他者の「彫刻」作業の感情は本質的に不可知であり、機械に至ってはINOMATAが「もう彫刻と呼べるのかどうかわからなくなる」(AKI INOMATA 2024, 103)と述べるように、造形の意図は存在しないかもしれない。ここでANTが直面するのは、理念的には理解できても、結局のところ各アクターとのつながりを概念レベルでしか捉えられないという限界である。けれども各アクターの視座を造形化してみるとどうだろうか。そこには「他者」の情動を表現し、それを解すること=翻訳を試みようとする想像力が眼前に立ち上がる。それは、いわば「翻訳の芸術(art of translation)」と呼ぶのに相応しい、INOMATAのアートだからこそなしうる仕草だといえるだろう。

「彫刻の作者はビーバーや機械」とわたしたちが紹介を受けたとき、戸惑いを覚える感覚とともに内包されているのは、差異を確認しつつも他者との関係性を想像し直す、現代社会における共存の可能性の契機なのである。

引用・参考文献

- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford, UK: Oxford University Press. (伊藤嘉高訳、『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局。)
AKI INOMATA, 2024, 「生きものと共にくるアート」桐光学園中学校・高等学校編、「高校生と考える人生の進路相談」左右社, 96-107.
岩崎秀雄, 2020, 「生きとし生けるものたちとの共創への問い合わせを巡って」美術出版社書籍編集部編、『AKI INOMATA: Significant Otherness 生きものと私が出会うとき』美術出版社, 148-149.
金澤顕, 2020, 「他者の視点で」美術出版社書籍編集部編、『AKI INOMATA: Significant Otherness 生きものと私が出会うとき』美術出版社, 18-23.

ARTIST
小山田 徹

会場:大教室タリアセン

「違い」を超えた共生のための技法

小泉元宏

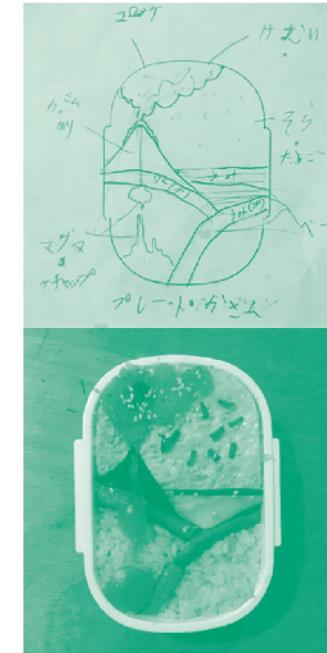
小山田徹の《お父ちゃん弁当》は、プロジェクト開始当初、幼稚園児だった息子をめぐってはじまったものである。息子の姉(小山田の娘)である小山田香月が、毎朝、即興でお弁当の絵を描き、それを徹が冷蔵庫にある食材で再現する。香月の絵は、本作品に見られるように、「そら」「かざん」「マグマ」「プレート」など、さまざまなイメージにあふれている。なかには素材の指定がない絵が多く含まれている。

こうした即興的な寄せ集めと工夫によって何かをつくり上げるブリコラージュの仕草は、遊び心に満ちたプロジェクトであると同時に、家族の関係性を結ぶ役割も担っていることは明らかだ。しかし一方で、「娘の頭の中はわかりませんが、素敵な情景をよく朝一番で思いつくな。素敵。」(2018年1月25日「海の夕焼け」) (山下樹里他編, 2021) といった徹のことばが示すように、プロジェクトが、家族である娘の感性との「違い」を前提にしていることも重要である。確かに「社会の最小単位」としての家族には共有される感覚が存在することも多い。しかし、それは決して均質な共同体ではなく、本質的に他者同士の関係である以上、異質性が同時に前提にある。そのようなお互いの「違い」を前提に、対等に向き合うことを可能とする「仕掛け」を設けるからこそ、異なる視点の組み合わせが生む創意工夫や関係構築の新たな希望が生まれるのである。

家族社会に限らない、現代社会についても同じことがいえるだろう。わたしたちは主観性の違いをお互いに認めつつ、互いの共有点をおもしろがりながら探るような態度からこそ、新たな創造の可能性を共有していくことができる。小山田はかつて、アメリカのニューメキシコの砂漠での経験をもとに、次のように書いている。

「私は他者にはなれない。でも、他者の視線は私に内在する可能性がある」(小山田 2005, 10)

彼の《お父ちゃん弁当》は、この思想が生む相互作用



お父ちゃん弁当 2017年8月4日「プレート・かざん」

小山田徹+小山田香月
2017年
size: 31.6×72.6×3.3cm

の可能性を、最も身近な社会で実践した記録である。絵を通じて他者の視点を受け取り、日々の行為をもつて——しかも即興とブリコラージュによって——応答を試みる。このささやかだが、かけがえのない実践は、他者性をいかにして架橋し、共生を築くことができるのか、その可能性をわたしたちに示している。

引用・参考文献

- 小山田徹, 2005, 「眺めるというコト」荻原康子編『小山田徹: しあわせのしわよせ』展——漫画家・瀧田ゆうの視線とのコラボレーション』財団法人アサヒビール芸術文化財団, 8-12.
山下樹里・横山由季子・阿部優理恵編, 2021, 『日常のあわい』金沢21世紀美術館監修, 青幻舎。

ARTIST

中崎 透

会場:講堂(舞台上)

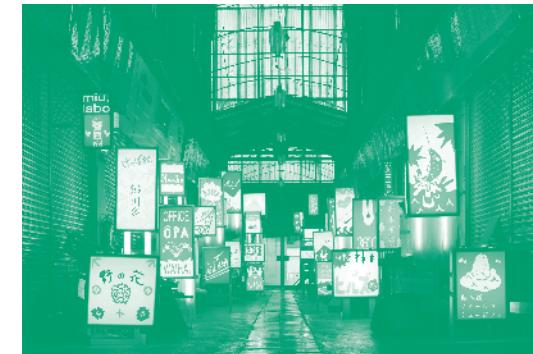
ありうるかもしれない世界のためのアート

小泉元宏

中崎透のアートの意味を考えることは、その表現としての特徴を理解するだけでなく、現代社会におけるアートとわたしたちの位置づけを問う問題でもある。今日、市民による文化生産の手段が急速に普及し、相互接続性が飛躍的に高まった一方で、わたしたちが声を上げるために権利やコミュニケーションの条件は決して平等なものではない。資本の多寡や社会的立場に起因する不平等のなかで、何を表現し、だれとつながることができるか、だれが発言力をもつのかが決定されているのだ。そして、このような状況は、過度に戦略的にデザインされた社会構造のなかでかたちづくられ、固定化されているように見える。しかし中崎のアートは、平等を表す社会において見過ごされる生や、ありうる可能性を、デザイン風・物語風・演劇風に〈演じ返す〉ことで反転させるための試みである。

2001年頃から中崎は、看板をモチーフとする《看板屋なかざき》シリーズを各地で展開してきた。このシリーズの特徴は、看板制作における依頼者と制作者の力関係を反転させるための一連の制作過程を含めて作品化する点にある。まず、依頼主と中崎が契約書を取り交わし、提供された情報を看板に記載するが、最終的なデザインは制作者側に委ねられる。通常、依頼主が優位に立ち、指示や目的にしたがって制作が進む関係性を搖さぶり、両者を対等な立場に置くためである。本来、対等なコミュニケーションは、相互の考えの違いに根ざす解釈のねじれや誤解、すなわち意識的・無意識的なミス・コミュニケーションを伴う。このシリーズは、そのズレを許容する「余白」を制作過程に意図的に組み込み、制作者の主体性を保持する枠組みを構築している。いわば見えにくい力関係を、契約書や看板を通じて可視化するのだ。それは、ポストフォーディズム社会においてアウトソーシングされ、流動的かつ便宜的に使われるクリエイティブ労働の主体性を回復する所作ともいえるだろう。

しかしまた同時に、中崎の「抵抗」は、社会運動などによる直截的な改革とは大きく異なり、看板群に見られる



看板屋なかざき

2014年 / ミクストメディア / size: 可変
photo: Kuniya Oyamada
(参考写真)

ような心象風景や、都市の小さな物語を通じて展開することも重要である。都市の風景や物語の断片を結びつけながら、見覚えがあるようでどこにもない景色や、ときにはありえないような想像を介して「ありうるかもしれない」可能性を紡ぎ出すことで、現実社会に介入するのだ。そこには、民話や戯曲など、創作としての文芸や表現が政治的転換に大きく寄与してきた歴史と同様に、勘違いや空想を通じて新たな情動や活動が引き出される可能性が潜んでいる。だからこそ、彼の作品に触れるとき、わたしたちはその空間や時間が別の時空を指し示すような感覚を抱く。そこには、固定化されたように思える取り巻く環境が暫定的な状況であること、そしてわたしたち自身が、その状況を変える主体となる力をもちうることを自覚する契機が示されているのである。

引用・参考文献

竹久俊・嘉原妙編, 2022, 『中崎透——フィクション・トラベラー』中崎透監修, 竹戸芸術館現代美術センター。
堀切春水編, 2025, 『Bluebird Sign／青い鳥のしるし』中崎透監修, 混浴温泉世界実行委員会。

ARTIST

宮永愛子 会場:ミニミュージアム(食堂) / ホール

見失われた存在と時間の物語を紡ぐために

小泉元宏

わたしたちの社会は、「いま」の消費を絶えず促している。オンライン購入からメールの受信ボックスにいたるまで、いま何を買うべきか、何を観るべきかを誘うリストで溢れかえっている。時間は、いまや次々と絶え間なく消費するための資源へと変質してしまったのだ。ジョナサン・クレーリーは、現代の常時接続の社会においては、あらゆる瞬間が消費の対象となり、本来は生産しない時間であったはずの睡眠も含め、生活や知覚のための時間がすべて資本にとらわれていることを述べている(Crary 2014)。

宮永愛子がガラスや石、ナフタリンなどを通じて提示するのは、このような時代に見失われがちな、過去・現在、そして未来へといたる時間をつなぎ直す物語、あるいは異なる場や視点が交差することで生まれる多層的・複眼的な物語の可能性である。例えば《留め石》は、同じ時の流れにありながら、しかし異なる視点や物語をまたぐ作品である。福島第一原発周辺の帰還困難区域を会場とする「Don't Follow the Wind」展を契機に制作された《留め石》を、宮永は区域の中と外、それぞれに展示した。留め石とは、本来、ある場に置くことによって、それ以上先の立ち入りを禁止することを示すものである。けれども彼女は2つの世界を区切るための石の意味を、むしろ別の場所にあっても同じく流れる時や、別の場所同士の視点の存在を相互に示し合うことで、それらの視点・物語の交差を促そうとする。宮永はいう。「あっちに行つてもこれがありますよ、私が作ったものはこれですってあえて発表することにしたんです」と(アートライティングスクール2021)。

さらにこの作品には、作家自身の呼気がガラスのなかに閉じ込められているのだが、当初の《留め石》制作の際、彼女は妊娠中であった。そのことについて宮永は、自身と胎児であった娘、「2人分の空気」が入っていると表現し、その後も、娘とともに呼気を込めた《留め石》を制作してきた。ここにも、異なる主観や時間の混在・併存を通じて、多層的に物語が交差する宮永作品の視点が示されている。

他方の《くぼみに眠る海—水鳥—》は、宮永の実家(曾祖父以来の陶房)の工場に積まれていた陶芸用の石膏型のなかの「くぼみ」(雌型部分)に眠り続けてきた100年前の「空気」に思いを馳せながら、雌型部分にガラスを注いで制作したものである。その際、宮永は、必ずガラスとともに気泡を入れる。そこには、以前から石膏像を満たしてきた空気を埋めたガラス像と、「いま」の空気が込められることによって、異なる



留め石

2023年 / ガラス、呼気、繩
size: 15 x 14 x 21cm
photo: MIYAJIMA Kei
©MIYANAGA Aiko, Courtesy of Mizuma Art Gallery

ときの移り変わりや関係性が示されてゆく。なお、今回の自由学園明日館での展示にあたり、作家は会場の歴史や空間を考慮しながら、2羽の水鳥を配置した。それぞれの水鳥の関係性や空間との呼応にもぜひ注目してほしい。

宮永作品の重要性は、単に造形の美しさや時間の移ろいを表現する稀有な価値にとどまらない。それは、作品が置かれた場所や、別の場所との関係性が生み出す物語による、あるいは、歴史の盲点やつながりを拾い上げることによって示される視点による、社会的な示唆をも含んでいる。そして彼女の作品は、空間と時間を超えて複数の視点を交差させることで、わたしたちに「ここ」、そして「いま」の意味を問い合わせてくれる所以である。



くぼみに眠る海—水鳥—

2022年 / ガラス、空気(東山窯の石膏型を使用)
size: 6.5 x 14 x 7cm
photo: MIYAJIMA Kei
©MIYANAGA Aiko, Courtesy of Mizuma Art Gallery

引用・参考文献

Crary, Jonathan, 2014, 24/7 : Late Capitalism and the Ends of Sleep, London; New York: Verso Books. (岡田温司監訳・石谷治寛訳,『24/7——眠らない社会』NTT出版。)
アートライティングスクール, 2021, 「宮永愛子インタビュー【前編】——3日後につながる隠し扉とは?」アートライティングスクールnote, (2025年9月13日取得, <https://note.com/artwritingschool/n/n5369568256d9>)
浅田真帆, 2024, 「インタビュー】『宮永愛子——詩を包む』長田実穂他編, 富山市ガラス美術館。

WORKSHOP

ワークショップ

触知図をつくるには

講師 上野智義
歐文印刷 ドキュメント制作室
シニアチームリーダー

会場 | 大教室タリアセン

10/21(火) 13:30-14:30

触知図は、施設案内図、防災マップ、マニュアルなどに活用され、形態も設置型や携帯型などさまざままで、視覚障害者と晴眼者が共通して使えるタイプも開発されています。実際に触知図を制作している技術者が講師となり、触知図をつくるのに必要な考え方、具体的な情報整理の仕方について、実物に触れ体感しながら考えます。

伝わるフォントと文字組を知る

講師 高田裕美
書体デザイナー

会場 | 大教室タリアセン

10/22(水) 13:45-14:45

印刷物や、会議、講座などで投影するスライドなど、情報を文章で表示する際に、文字組みやデザインをどのように工夫すればより多くの人に「伝わる」かたちにできるのか、その使い方を講師や参加者同士の意見交換を交え、演習しながら習得していきます。

「やさしい日本語」で話す

10/23(木) 13:00-14:00

講師 戸嶋浩子
清水エド
ひらがなネット

会場 | 大教室タリアセン

外国人やこども、高齢者など多様な人へのわかりやすさ、伝わりやすさを高める「やさしい日本語」の導入は、アクセシビリティの向上につながります。このワークショップでは「やさしい日本語」の共通ルールを知り、伝え方の練習をします。相手を思いやり、一人ひとりに合わせて言葉を選択することの必要性を学んでいきます。

自由学園明日館 建物解説ツアー

10/21(火)、10/22(水)、10/23(木) 11:30-12:15

本会議の会場となる明日館は、自由学園の創設者である羽仁もと子・吉一の理念や、当時の女学生たちの生活の軌跡が随所に刻まれた趣ある建物です。フランク・ロイド・ライトとその弟子の遠藤新の設計により1921年から建設され、1997年に重要文化財に指定されています。明日館館長がツアー形式で、その建築の歴史と魅力を解説します。

集合場所 | ホール

NET WORKING

ネットワーキング

動画における情報保障

10/22(水) 13:20-14:00

会場 | ホール

登壇者 二瓶 剛
ディレクター
平塚千穂子
CINEMA Chupki TABATA 代表

会議やイベントにおける、対面やオンラインによるハイブリッド開催や、アーカイブ動画の配信は、急速に需要が拡大しています。「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の「だれもが文化でつながる国際会議 2024」のアーカイブを実例に、動画制作の専門家とユニバーサルシアターの創設者が、動画に必要な情報保障について語ります。

盲ろうの世界に触れる

10/23(木) 13:20-14:00

会場 | ホール

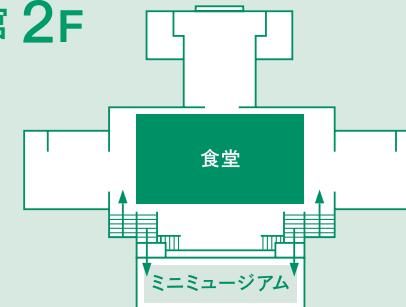
登壇者 田畠快仁
触覚デザイナー・アーティスト、
京都芸術大学大学院 芸術研究
科芸術環境専攻
森 敦史
筑波技術大学 障害者高等教育
研究支援センター 研究員

盲ろう者のコミュニケーション方法は、触手話、点字だけでなく、コンピューターやアプリを使った文字によるコミュニケーションなど多岐にわたり、日常的にさまざまな方法を駆使して生活しています。盲ろう者が社会とかかわり、意思疎通を図ることの楽しさについて登壇者二人が語り合い、併せて参加者と交流します。

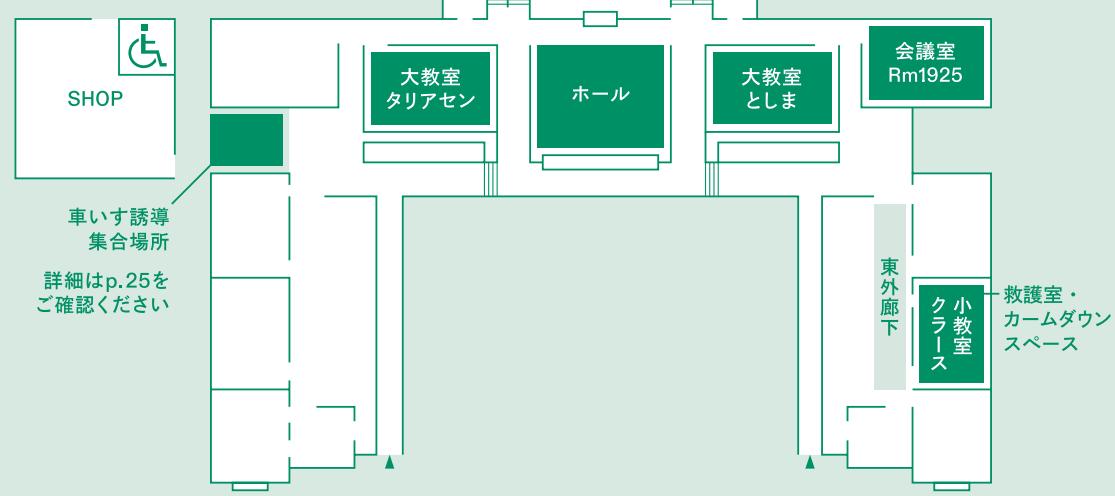
MAP

マップ

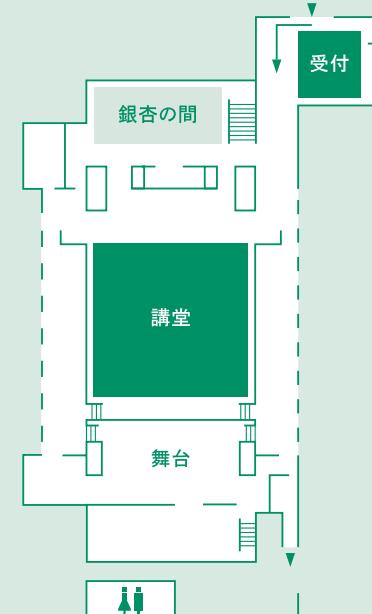
本館 2F



本館 1F



公道



▶ 新しい博物館定義

博物館の役割とされる「収集、保存、展示、調査、研究」といった学術研究的側面に加え、「包摂的」「持続可能性」「コミュニケーション」「コミュニティ」「省察」といった言葉が盛り込まれた、社会課題に対する博物館の社会的役割を大きく更新させた定義。2019年のICOM（国際博物館会議）京都大会で提出された定義案の継続審議を経て、2022年のプラハ大会で新しい博物館の定義として採択された。欧米の文化政策では、博物館をウェルビーイング推進の拠点と位置づけた取り組みを推進している。

ICOM日本委員会による日本語確定訳文

「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」

引用・参考文献

ICOM（国際博物館会議）日本委員会, 2023, 「新しい博物館定義、日本語訳が決定しました」, (2025年9月20日取得, <https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188>).
Konta, 2024, 「博物館の定義から経営を考える——ICOM定義の変遷とその意味」, Museum Studies JAPAN, (2025年9月20日取得, <https://museumstudies.jp/2024/05/28/what-is-museum-definition>).

▶ アートプロジェクト

社会学者・文化政策研究者の小泉元宏は、「アートプロジェクトは、地域の過疎化や疲弊といった社会問題、あるいは福祉や教育問題など、さまざまな社会・文化的課題へのアートによるアプローチを目的としながら展開している文化事業、ないし文化活動である。」と定義している。東京藝術大学教授の熊倉純子は、日本国内で展開されるアートプロジェクトを研究する公開講座の成果として、欧米圏では「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」と呼ばれる活動に対する言説のみでは説明のつかない事象を「日本型アートプロジェクト」として概念化した。要約版を収録した『「日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990年→2012年」補遺』(先行して英語版が刊行され、日本語版はその翻訳である)を参照されたい。

▶ 合理的配慮

2014年に日本が批准した「障害者の権利に関する条約」第2条によると、「『合理的配慮』とは、障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。」としている。国内では、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）に基づき、2024年4月1日から事業者による「合理的配慮の提供」が義務化されている。

▶ 文化的コモンズ

地域の共同体のだれもが自由に参加できる入会地のような文化的営みの総体。英語のコモン（common）という言葉には、「共通の、公の、公共の」といった形容詞としての意味があり、複数形のコモンズ（commons）は、「共有地、公共緑地（広場・公園など）」といった意味の名詞でもある。日本では、地域の共同体が、薪炭・用材・肥料用の落葉を採取するために総有する山林や原野などの土地を「入会地」と呼び、これが英語のcommonsに相当する。文化的コモンズを形成する主体は、地域で継承されてきた伝統芸能やお祭り、NPO、文化団体、商店街や自治会など地域の多様な担い手が含まれる。これらの主体が互いに手を結び、公立文化施設を拠点に、地域の多様な文化的営みを共有し、分かち合える場を文化的コモンズとしている。

引用・参考文献

小泉元宏, 2012, 「地域社会に「アートプロジェクト」は必要か?—接觸領域（コントクト・ゾーン）としての地域型アートプロジェクト—」『地域学論集 烏取大学地域学部紀要』第9巻第2号: 77-93, (<https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/records/257>).
熊倉純子・長津結一郎・アートプロジェクト研究会編著, 2015, 「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年」補遺』アーツカウンシル東京, (https://tarl.jp/archive/art_projects_history_japan_1990_2012_hoi).

引用・参考文献

外務省, 2014, 「障害者の権利に関する条約」 (https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html?_klpuid=GwKq2LGpnkQhX6L36mXkc%2Ftdl%2Fdata%2F).
政府広報オンライン, 2015, 「事業者による障害のある人への『合理的配慮の提供』が義務化」 (2025年9月20日取得, <https://www.gov-online.go.jp/article/202402/entry-5611.html>).

引用・参考文献

地域創造, 2014, 『災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究報告書—文化的コモンズの形成に向けて—』, (https://www.jafra.or.jp/fs/2/4/6/3/9/_/24-25_1.pdf).

▶ 障害の社会モデル

障害は個人の心身の機能や構造上の損傷を指すという考え方を、障害の「医学モデル」という。これは「個人モデル」とも呼ばれ、障害を個人に内在する属性として捉え、障害の克服のための取り組みは、もっぱら個人の適応努力によるものとしている。一方、障害の「社会モデル」とは、障害は、社会における多様な障壁によって生じるものとする考え方である。障害者差別解消法においては、「医学モデル」ではなく、「社会モデル」を取り入れており、「社会モデル」は、国連が採択し、190カ国以上が締結している障害者権利条約にも見られる、世界の潮流の考え方である。また「障害者対策に関する新長期計画の策定」では、社会における多様な障壁を、「障害者を取り巻く社会環境においては、交通機関、建築物等における物理的な障壁、資格制限等による制度的な障壁、点字や手話サービスの欠如による文化・情報面の障壁、障害者を庇護されるべき存在ととらえる等の意識上の障壁」の4つを挙げ、それらの障壁の除去に向け各種施策を計画的に推進するとしている。

引用・参考文献

内閣府, 2013, 「障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針」 (2025年9月20日取得, <https://www8.cao.go.jp/shouga/suishin/sabekai/kihonhoushin/honbun.html>).
内閣府, 2002, 「障害者対策に関する新長期計画の策定」 (2025年9月20日取得, <https://www8.cao.go.jp/shouga/asianpacific/ootsureport/1-1.html>).
日本ケアフィット共育機構、「障害の社会モデル（共生社会とのバリアフリー）」 (2025年9月20日取得, https://www.carefit.org/social_model).

▶ セツルメント運動

19世紀末のイギリスに端を発する社会改革運動で、主に大学出身者や宗教家など中産階級の人々が、貧困層が暮らす地域（スラムなど）に住み込み、地域住民と生活をともにしながら教育・福祉・文化活動を行う取り組みを指す。支援者が地域に「根を下ろす」かたちで活動することが特徴であり、1884年に建てられたロンドンの「トインビー・ホール」は世界初のセツルメント運動の拠点として知られる。日本でも、大学、キリスト教や仏教などの宗教関係団体や、地方公共団体などがかかわって拠点がつくれられ活動が展開していき、現在の社会教育活動や地域福祉活動につながっていった。

引用・参考文献

大林宗嗣, 1926, 『セツルメントの研究』同人社書店.
川上富雄, 2024, 「セツルメント史概観—その誕生から日本における実践まで—」『駒澤大學文學部研究紀要』第81号: 79-98, (<https://komazawa-u.repo.nii.ac.jp/records/2002837>).

▶ セルフアドボカシー（自己権利擁護）

障害があっても意見が尊重され、最善の利益が考慮されるための支援や、自身の意見が代弁される権利を守るために、自分自身が、権利、利益、ニーズを自ら主張したり、他人に理解してほしいことを伝えるスキルのこと。

引用・参考文献

国立成育医療研究センター, 2020, 「セルフアドボカシーってなあに?」, (2025年9月20日取得, <https://www.ncchd.go.jp/news/2020/leaflet13.pdf>).
片岡美華, 2012, 「青年期発達障害者のセルフ・アドボカシー・スキル獲得にむけた教育プログラム開発」, (2025年9月20日取得, <https://core.ac.uk/download/pdf/144572186.pdf>).

▶ 創造美育運動

1952年に久保貞次郎らによって提唱された美術教育運動。久保はオーストリアのフランツ・チゼックの美術教育論を背景に創造美育協会（創美）を設立。こどもの内にある創造力を、美術を通じて引き出すことを目的としている。模倣や技術指導を排し、自由な表現と精神的な解放を重視。教師は環境を整え、こどもの表現を励ます役割を担う。創美的思想を受け、自由学園創設者の孫、羽仁進の監督・脚本によるドキュメンタリー映画『絵を描く子どもたち』(1956年)も誕生した。

引用・参考文献

大橋功他編, 2018, 『美術教育ハンドブック』神林恒道・ふじえみつる監修, 三元社.

▶ レッジョ・アプローチ

北イタリアの都市レッジョ・エミリア市で行われている幼児教育。「こどもを有能で創造的な存在」と捉え、環境や対話を重視した探究的でユニークな教育法は、「最も革新的な幼児教育（『ニューズウイーク』誌、1991年）」で紹介され、世界中の注目を集めた。レッジョ・アプローチは、その礎を築いた教育者ローリス・マラグツィの「100の言葉」の考え方を基にしている。こどもは「100の言葉」をもつとし、無数の方法で世界を理解し表現する力をもっており、その可能性を奪わず育むというものである。

引用・参考文献

レッジョ・チルドレン・ワタリウム美術館編, 2012, 『子どもたちの100の言葉』田辺敬子他訳, 日東書院本社.
ワタリウム美術館編, 2011, 『驚くべき学びの世界——レッジョ・エミリアの幼児教育』佐藤学監修, 東京カレンダー.

「居場所とわたし」の「わたし」を求めて

森司（アーツカウンシル東京）

—すべての人のウェルビーイングへ

本会議の登壇者の方々と準備を進めるなかで、一つの仮説に思い至りました。——「ウェルビーイング」を、自己肯定を含む幸せの実現とするならば、「わたし」の存在は不可欠ではないだろうか。そうであれば「居場所とわたし」を起点とする議論は、「わたしの居場所」をめぐるものになり、「わたし」について考え、他者について意識するものにならざるをえないのではないか——、と。

障害の有無、世代、性、国籍、住環境を含め、その人その人の特性や個性により、安心して居られる場所は異なります。「わたし」を起点に、共生社会の実現の姿を思い描き、「だれもが」の「ウェルビーイング」について思考を重ねたいと思います。それはどのような活動によってもたらされるのでしょうか。このような視点の獲得と共有について、芸術文化の側から考えてみたいという気持ちが、今回のプログラムをかたちづくっています。

2024年度より、東京都歴史文化財団が運営するすべての文化施設には、社会共生担当という専任の職員が配置され、「だれもが」芸術文化を享受できる環境づくりを推進しています。この「だれもが」は、漠然とした目標ではなく、「だれ」に届けるのかを明確にすることが求められます。「わたし」という対象者への取り組みによる「だれもが」へのアプローチは「ウェルビーイング」に向き合うための姿勢と言えます。

—7つの柱となる「セッション」

全4日間の柱となる「セッション」は、会議全体のテーマの章立ての役割を担っています。オープニングセッションは3日間の対話に向けた導入として、どんな話が展開されるのか、その土台がイメージできるものとなるはずです。そして5つの対話を通して、「居場所とわたし」が、クロージングセッションのタイトルにある「わたしの居場所」へと徐々に移行していきます。「わたし」の外側にあった居場所が、「わたし」という自認性をもつことで他者や外界を意識し、能動的な「わたし」がつくる居場所へと変容するという構成になりました。

オープニングセッションの「『生活圏』とアート」では、2人のアーティストと社会学者の小泉元宏教授を招き、芸術文化活動がウェルビーイングをもたらすために必要な、世界の受け入れ方のヒントを、活動の事例を通して共有したいと考えています。アーティストは、アーティストリサーチもしくはフィールドワークと称される、個人単位としての「人」と対面して話を聴く手法を用い、そこに少しだけアーティスト本人の「わたしらしさ」を加味します。そのアーティストの所作は、社会課題を外在的で大きな存在のまま処理しようとする態度とは異なります。課題を頭だけで捉えず、肌で引き取り、内臓に溜めて考え、「わたし」という主語を挿入します。「居場所とわたし」のテーマのもとに展示される4人のアーティストの作品が示す、身体性と思考の跳躍を感じ取っていただければ幸いです。アートというジャンルにと

どまらず、言葉や概念に縛られることなく、柔らかな想いが活動に結びついた登壇者の対話は、アートの気配に満ちた時間になるものと思っています。

—本会議で言うところのアートについて

1947年、のちの日本画家、平山郁夫画伯が東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学した際、上野直昭校長は訓示として「諸君らのうち宝石はたった一粒です。その一粒を見つけるために君らを集めた。他は石にすぎません」と語ったそうです。何百人という新入生のなかから一人のスターを生み出すことが美術大学教育の目標とされていた時代から70年以上が経過し、東京藝術大学の日比野克彦学長（2022年から現職）は、2024年開催の国際会議に登壇した際、自分が数々のアートプロジェクトを展開してきた理由として「多様な人々と出会い、社会のなかでアートのもつ力が発揮できる」点を挙げました。そして京都市立芸術大学の小山田徹学長（2025年から現職）は、入学式の式辞で、芸術の存在を「生きるための技術」と表現しました。クロージングセッションのタイトルにある「未来のあたりまえを考える」の言葉は、この式辞で語られた「『芸術』の創造とは、『未来の当たり前』を創ることだ」からの借用です。アーティストであり芸術大学の学長である二人の言葉は、教育現場のみならず社会におけるアートの役割の変容を明示するものといえるでしょう。

—自由学園明日館という学びの場

自由学園明日館での開催は、会議全体に思わぬ大きな影響を与えています。2024年の国際会議では、ラファエル・ヴィニオリ設計の巨大で勇壮な東京国際フォーラムに多くの人々が集いました。2025年の国内会議では、コンパクトでアットホーム感のある柔らかな空間で「居場所とわたし」について考えてみたいと思いました。近代建築の三大巨匠の一人であるフランク・ロイド・ライトとその高弟・遠藤新の設計の建物は、100年以上の歴史をつむぎ、保存修理工事を経て「動態保存」され現代に生き続け、1921年に女子の学校として創立した羽仁もと子・吉一夫妻の「自分たちの考える新しい社会をつくりたい」という理念をいまに伝えます。自由学園明日館という「学びの場」を意識して、黒板に指紋をチョークで描いた「わたし」がメインビジュアルです。

—「わたし」を内包する「新しい公共」

1995年の「阪神・淡路大震災」時に、アーティストを含むボランティアによる支援活動が発生し、1998年には、ボランティア活動を支援する新たな制度として、特定非営利活動促進法（NPO法）が成立しました。市民団体を「公」の担い手とするこの法案は、「新しい公共」という概念のはじまりとして知られています。

2009年には、「コンクリートから人へ」という政策スローガンが民主党政権下で掲げられました。大型公共事業への重点的な予算配分から、子育て、教育、医療、福祉など「人」を重視した政策への転換を進めるなか、当時の鳩山由紀夫首相は所信表明演説で、「私が目指したいのは、人と人が支え合い、役に立ち合う『新しい公共』の概念です」という言葉で、その考えをあらためて示しました。さらに翌2010年に発表された新たな成長戦略の基本方針には、「『新しい公共』の考え方の下、全ての国民に『居場所』と『出番』が確保され、市民

や企業、NPOなど様々な主体が『公』に参画する社会を再構築することは重要な課題である」と記され、ここにも「新しい公共」「居場所」という言葉が使われています。東京都の文化施策として2009年から展開したNPOをパートナーとする「東京アートポイント計画」もこのような時代の流れを受けてのことでした。

災禍という言葉をもち出すまでもなく、2011年の「東日本大震災」、2024年の「能登半島地震」などの自然災害下での民間ボランティア活動の根付きは、「わたし」を起点とした住民、NPO、企業、大学などの活動の原動力となり、ウェルビーイングを生み出すものとして期待したいと思います。

ときに公共の場は、多数派の意見が採用され、少数派は見えにくいインビジブルな存在になります。「新しい公共」であるNPOという法人格の単位よりも、さらに小さな、それでいて絶対的な存在、尊厳を伴う個人の単位の活動を支える概念として、セルフアドボカシー（自己権利擁護）という言葉を想起したいと思います。自分自身のために、希望や権利、必要なことをしっかりと伝える。自分で考え、声を上げる。その主体的な存在であることを、互いに認め合える社会へ……。

本当の意味での「だれもが」になるための芸術文化活動とは何かと考えたときに、まだ活動や概念を示す言葉の用意もできていない領域で、その道を切りひらく活動をし続ける人たちの姿が見えてきます。

—登壇者のみなさんと「対話」の意味

「居場所とわたし」の会議の準備を通して見えてきた今回のセッションやセミナーの登壇者のみなさんは、自分の「居場所」をつくり上げ、既存の概念を解きほぐし、ときに破壊しながら、その先を切り拓いてきた「開拓者」のような人たちだと思います。

国際会議に登壇された哲学者・梶谷真司教授は、「『哲学』とは、問い合わせ立てて考えることです。『対話』とは、お互いに話して聞き合うことです。なので、わたしは『哲学対話』を、ともに問い合わせ、考え、語り、聞き合うことだと定義しています」と説明し、「哲学対話」の実践をされています。わたしはこの対話の手法を受け継ぎたいと思いました。

予定されたシナリオはなく、進行はモデレーターに託しつつ、登壇者同士の事前のミーティングを経て、互いを知り尊重し合う関係のなかで、知見の共有の先にある新しいテーマの糸口がもたらされるのではないか。そのような期待を抱いています。

同時に、開催される7つのセミナーでは、先達の実践者の具体事例からの学びを通して、その先にあるテーマの共有が図れるものになることを望みます。

各プログラムは連動し、どこかがつながりシンクロする構造になっています。「自由学園明日館」という会場の力もあいまって、オータムセッション2025は、すべての人の「学びの場」となります。

職域を問わず、一生懸命に何かに取り組み、それゆえに悩んでいる方々に足を運んでいただくことで、少なくとも仲間がいることを感じられる場になるはずです。トークショーでもイベントでもない4日間に集うみなさんにとって、創発的で能動的な場となることを願っています。



乳幼児から高齢者まで、障害の有無、言語・文化の違いを超えて、多様な人々が文化事業に参加し、ともに創造していくための環境整備や調査・検証・開発に取り組むプロジェクトです。芸術文化を通した共生社会の実現を目指し2021年度に始動。東京都の2030年に向けた文化政策（「東京文化戦略2030」）に基づき展開しています。

都立文化施設やアーツカウンシル東京で展開する文化事業等のアクセシビリティ対応においては、来館・参加するまでの情報提供やサービスの向上、鑑賞・参加体験を豊かにするための取り組みの促進、障害当事者等の企画運営への参画を推進し、だれもが芸術文化にアクセスしやすい環境を目指します。

また、芸術文化によるウェルビーイング向上にかかる国内外の実践者とのネットワークを醸成し、プロジェクトの実践を通して、共生社会の実現に向けた取り組みを発信します。

ACCESSIBILITY SUPPORT

アクセシビリティサポート

会場での各種サポートについては「受付」(講堂前)にお問い合わせいただくか、
お近くのスタッフにお声がけください。

手話



字幕



筆談



セッション、セミナー、ワークショップには手話通訳および字幕がつきます。
テーブルトーク、自由学園明日館建物解説ツアーは手話通訳のみ。

スタッフは筆談での対応が可能です。

車いす



カームダウンスペース



会場内の段差にはスロープを設置しています。車いすをご利用の方には、スタッフが一部別導線をご案内します。ご利用の際はお近くのスタッフにお声がけください。

小教室クラスにカームダウンスペースを設置しています。ご利用の際はお近くのスタッフにお声がけください。

食堂への車いす誘導について

車いすで食堂へ行かれる場合は、エレベーターでご案内いたします。お近くのスタッフにお声がけください。
食堂でのセミナーにご参加の方は、開始20分前に車いす誘導集合場所(p.18)へお集まりください。
厨房棟を通って食堂へご案内いたします。

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー だれもが文化でつながるオータムセッション2025 「居場所とわたし」

企画

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

森司 岡崎未佑 竹丸草子

永峰美佳

小泉元宏 綿貫愛子

蔭山大輔

池田 宏 …… p.7・8 森司プロフィール写真、p.10 佐藤李青プロフィール写真

梅田彩華 …… p.7 富塚絵美プロフィール写真

小禄慎一郎 …… p.9 石井健介プロフィール写真

川瀬一絵 …… p.10 佐藤慎也プロフィール写真

草本利枝 …… p.8 砂連尾理プロフィール写真

栗原 諭 …… p.8 駒井由理子プロフィール写真

品田裕美 …… p.8 斎藤紘良プロフィール写真

清水朝子 …… p.7 唐川恵美子プロフィール写真

松蔭浩之、Courtesy Mizuma Art Gallery …… p.7 宮永愛子プロフィール写真

Hana Yamamoto …… p.10 渡辺龍彦プロフィール写真

誠晃印刷

2025年10月27日 更新版

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス5階

印刷

発行

